

全国協力員研修会議基調報告

守る会全国本部 事務局次長 塩田 隆

2000年に、健康と生活実態把握調査(4年に1度の訪問調査)から救済事業協力員活動に変わった。
今年4月から、また新たな活動に変わった。

1. 背景① 運動の担い手が親から被害者へ

(1)親が中心であった時代

こどもに対する深い愛情、幼い子の命を守る責任感の他に、いやがる子供にミルクを無理やり飲ました子供に対する負い目(悲痛さを感じた)が原動力となり、自分の身を削ってでも子供を守る運動ができた。

(2)被害者仲間が中心となった時代

仲間同士のつながりづくりとしての連帯感が原動力

仲間づくりの3つの愛

①出あい・・・同じひ素ミルクを飲んだ仲間としての出会い(すぐ親しくなれる)

②認めあい・・・利害関係のない飾る必要のない、ありのままのお互いを認め合う、そういうつながり

③助けられあい・・・〇〇してあげるでは長くもたないが、助けられていると感じれば、自分も助けてあげられるし、ありがたいと思える。

2. 背景② 三者会談方式(ひかり協会方式)

(1)一時金ではなく恒久救済の道を選択した

(2)「三者会談確認書」

- ・三者会談確認書に基づき、三者が恒久的に救済すること
- ・三者が信頼関係を持って定期的の話し合いを実施し、責任を果たしていくこと

①国は自らの責任を認めた上で、行政上の措置を依頼した時の協力(行政協力)

②森永は企業の責任を全面的に認めた上で、被害者救済のために一切の義務を負担

・40年間、必要とする費用の一切を負担(40年間で、総額の500億円)

※通常の救済はここまで、これだけできるとすばらしい救済と言える。

③被害者は被害者の立場で救済に協力する。(守る会は救済事業の具体化に主体的に協力)

・協力員活動は、守る会の組織的な協力の代表的な活動

3. 協力員活動に対する内外の評価

協力員活動は、たいした事はしていないと思うかもしれないが、被害者同士が助け合っている団体は森永以外にない。14年目の訪問に関わってくれた保健師さんは、優しさを届ける活動で、世界に類を見ない活動、WHO(世界保健機構)に報告すべき活動と高い評価をしてくださった。

専門家の先生方も高い評価いただき、しっかり協力してくれるし、社会的な支持もある重要な活動。

(1)協力員体制

第一次10ヵ年計画の総括から、はじめの頃は393名でスタート(2003年)しましたが、今は636名(2014年3月)に増えた。数だけではなく10数年間協力員活動を積み上げて来たなかで、対象被害者との信頼関係が築かれてきたし、連帯感が深まってきた。

協力員活動の基盤ができたことが第一次10ヵ年計画の総括であった。

(2)今後の課題

定年退職し、社会とのかかわりが急速に減っていった時、健康を守り合い、ひとりぼっちにさせない事。そんな活動を少しでも長く、楽しくすることが大切です。

そのために、自主的健康管理の援助要綱が新しくでき、さらに救済事業協力員制度要綱も改正された。

4. 新しい協力員活動

健康目標をもち、呼びかけ活動を重視し、連帯して健康を守るネットワークづくりに重点を置いた活動を進める。

5. 救済事業協力員活動の要綱の主な改正点

以前おこなっていた、健康と生活実態把握調査の調査的な要素を残していた2年に1度のおたすねを止めて、協力員しかできない仲間としての声かけを重視することが一番大きな変更点です。

仲間として、健康に気づいたり、こんな事業があるからこないという声かけをすることにポイントを置く

「運動せなあかんあ！、食べ物はこれでいいのか？」などの健康意識の高まりは、ひとりではむずかし

い。そこで1年に1度かもしれないが、協力員が声をかけて、「健康どう、体調どうと聞いてもらったり、検診に行こうねと勧めてくれたり、健康を考えるこんな揚があるからおいでよ」とよびかける事が力になる。さらに「健康設計」書きづらいですか？これをよびかけの時、使う事を提起したいと思います。この10年間に自分のためにしたい事。（夢であったり、楽しい事）を交換する。そういう楽しい事、夢をかなえるためには、少しでもいい、健康も考えないとね！健康目標を持とうよという話になっていけば良いと思っています。

西近畿ブロックの健康目標（例：ひかりダイエット会）

・ひかりダイエット会の合言葉 今年も、”ふ” ”ふ” ”ふ” → ふゆに ふっくら ふとらない

・検診結果は → Love Letter from からだ

検診結果は、年を重ねるとあまり良くない、また検診を長くしてないと「結果がこわいからしない」かもしれませんが、検診結果はカナダからの愛の手紙なんです。という愛しい意味が込められているんだらう思います。

6. これからの協力員活動

(1) 仲間同士で支え合う-2つのネットワークに仲間として関わる

協力員の皆さんの創造的で楽しい活動にゆだねる。 被害者から相談をうけたり、助けてと言った発信を受けた時、基本としては協会につなげる。 仲間として受け止められる(聞ける)揚をつくるのが大事。

できたら、地域ごとの協力員が仲良くなって、連絡し合えるようになったら良い。

2つのネットワーク ①よびかけ活動を基本にした連健ネット ②障害のある被害者との関係：ふれあい活動で知り合う、交流会で仲良くなる。障害者にとって、仲間が訪問してくれるという事はほんとにありがたく、喜んでくれる。 この2つのネットワークに関わって欲しい。

(2) 仲間と自分らしく楽しく生きる一関係性の中で生きる

東近畿ブロックでの取り組み、先日、二次障害実態調査に関する懇談会があり、そこには障害のある被害者はもちろんですが、守る会の役員さんも出席しました。その中で守る会の役員さんは懇談会が終わった後、こう言われました。被害者同士が支え合っていく事を中心に据えて活動したい。障害のある仲間から学ぶ事もたくさんある。協力員として人とのつながり、見守りを少しでもやっていきたい。被害者であった事をマイナスに思わないでプラスにしていきたい。という発言があった。

高齢の人に年を取ってつらい事は何かと聞くと、一番は体の具合が悪いと言われる。と並んで多いのがひとりりでさびしいんやと言われる。孤独感、私たちも通って行く道ですが、まわりに大勢の人に囲まれて生活できている人は良いが、今まで仕事をしてきて、誰かと関わって、役に立っているという意識があったが、それが無くなって、世間との関わりが薄くなり、まわりに誰もいない、1日中しゃべる事が無い、「犬とテレビだけや」こういう事がくるかもしれない。でも私たちには、幸いにも仲間がいる。そして協力員はその仲間達が集まる場に「おいでよ」と声をかけることができます。そして、「体の具合はどお」って心配しながらたくさんをつながりを作ることができる人達なんです。

障害のある仲間は、懸命生きています。彼らの生活とか、思いとかを見聞きしたら、逆に励まされることがある。「この人達のために僕、何かしたいなあ できる事ないやろか」と考えます。そんな彼らからもらえる物を皆さんも経験して欲しいと思います。

健康を守り合う。一人ぼっちにさせない。また自分も一人ぼっちにならない。そういった活動を、かた意地はらずに、楽しく、面白がって、長あく続けていくこと。

(3) 「いのちを守りつづけること」一都道府県守る会の機関紙より

私たちは、障害のある仲間の事を思い、すべての被害者の健康を願い、これからの課題に連帯して取り組もうとしています。被害者同士が連帯して取り組む、これこそ親たちが望んでいた恒久救済への道だと思います。私たち守る会は、恒久救済の原点となった子供のいのちを守るという思いを受け継いで、自分のいのちを守り、仲間のいのちを守り続ける活動をますます一致団結して取り組んでいきましょう。